

先日、園庭の大型のぼり台(滑り台)を改修しました。

これまでまっすぐだった斜面の下方にカーブをつけ、斜度はこれまでより少しきつめにしました。これにより、下から登る難易度がUPし、簡単には斜面を登れないようになりました。というのも、これまでのものでは、1歳児等の小さい子どもでも、比較的簡単に登ることが出来てしまっていたので、子どもが上に登っている間じゅう、保育者がそばについて、ドキドキしながら見守ってはいませんでした。さらに、上から滑るときも、カーブの無い斜面では、着地の際の衝撃が大きくなってしまっていたため、下にマットを敷いておかねばなりませんでした。それが、今回、下方にカーブをつけたことにより、着地の際の衝撃を和らげることができるようになりました。



さて、改修が終わって、さっそく1日目、フェイスブックで動画を見られた方もいらっしゃると思いますが、2歳児さんたちが真っ先に挑戦。しかし、斜度がきつくなり、おまけに板も新しく滑るため、斜面から登ることが出来ません。2歳児のI君などは20分以上も格闘していました。ついには別のルート(はしごの方から)で登りましたが、滑っても、転んでも、繰り返し登ろうとチャレンジする姿に、感動すら覚えました。

その翌日は、着地点をプールにして、わざとツルツル滑るように滑り台の上から水を流して、ウォータースライダーにしてみました。子ども達、「わあ～たのしそう～！！」と次々上まで登りましたが、(はしごの方から)、いざ上に上ると下から見ていた時よりも高く感じ、斜度もこれまでよりきつくなっているの、滑るのにも勇気が要ります。「やっぱりやめる～」という子が続出。

そんな中、真っ先にチャレンジしたのは、年中のA君。よ～し、いくぞ～と滑り台の縁に座るも、やっぱり怖くて、長いこと座って、「怖さ」と格闘していました。15分～20分ぐらひは格闘していたでしょうか、少しずつ、少しずつ、お尻を下げ、ほとんど寝そべるような状態になり、覚悟を決めて滑りました。ジャブン！と着水し、「やった！」という満足げな表情でこちらを振り返りました。一度、行っしまえば、もう平気、その後、何度も何度も繰り返し、お尻が真赤になるほどでした。



そして、もう1人、年長のR君。早くから上に登っていましたが、ず～っと1人で葛藤していました。スタート地点に座っては、じっと下を眺め、自分で「3・2・1…」とカウントダウンをはじめ、いよいよ覚悟を決めて行くか！と思いきや、「やっぱりやめとく」と立ち上がり、諦めるのかと思いきや、またスタート地点に座って、下を眺めるの繰り返し。Rくんは少なくとも30～40分は格闘していました。その間、先に滑れるようになったAくんからは、「俺が教えてやるけん」とか、他の女の子たちからも「滑らんなら代わって！」などと言われながらも、立ったり、座ったり、葛藤していました。そして、何回目かの挑戦で、ついに、自分で覚悟を決めて滑りました。着水時にお尻ではなく、腰から行ってしまい、少し痛かったようですが、そんなことはものともせず、すぐさま滑り台の上まで登って、保育者とハイタッチ、A君や周りの子たちと笑顔で喜びを分かち合っていました。その、うれしそうな顔、僕にも出来た！という満足感に溢れていて、本当にうれしそうです。



こういう場面では、単なる「度胸の有る無し」で子どもを見たらいけないと思います。子どもなりに「自分にできるかな」「やってみたいけど、怖いな」「失敗したらどうなるかな」「痛いか」「成功したら気持ちいいだろうな」「でも」…などなど、頭のなかではきつといろんなことを考えているでしょう。「やっぱりやめとく」という選択肢も、先を予測し、ケガをしないためには重要な選択ですし、大切な経験です。まわりが「意気地なし！」などというのは言語道断。しばらく見守っていると、一度はやめようと思ったけど、「やっぱりやる」と戻ってくるなんていう姿もよくあります。「やりたい！」「でも怖い。」「成功した自分」と「失敗した自分」を頭のなかで何度もシミュレーションし、天秤にかけ葛藤します。それを繰り返しながらも、子どもは、いつか自分で、その壁を乗り越えようとします。子どもはそうやって成長していくものだと思います。

こんなとき、大人は無駄な声掛けを控えるべきです。「行くか、行かないか」は本人が決めるべきです。自分で「やれそう」と見極められるまで葛藤を経験することがとても大事だと思います。「よし！行くぞ！」と覚悟を決めるまで、大人はひたすら待ち続けたいと思います。子どもは自ら成長したいと願っているのです。だからこそ、「大人からの働きかけ」が強くなり過ぎないように、「自分のタイミングで」、「自分で覚悟を決めるまで」を大切に見守っていきたいと思うのです。